

地域連携を通じた木育教材の開発 —木育ワークショップに参加した学生の学びから—

矢野 真 田 爪 宏 二
(児童学科教授) (京都教育大学准教授)

1. はじめに

京都女子大学と京都刑務所の連携協定¹⁾の一環として、保育現場で「木育」を中心とした造形ワークショップを行っている発達教育学部児童学科・造形ゼミでは、京都刑務所内の作業部門でつくられる、子どもが使用する木工玩具のデザインを通して連携を行うこととなった。それに関連した事業として、京都刑務所主催の京都矯正展に造形ワークショップでの参加をすることとなり、第39回京都矯正展において造形ワークショップを開催、以降、第40回展、第41回展と3回の実施となる。

第39回展では、「お箸づくり」²⁾を実施したが、学生のデザインを提供する機会をもつことができなかった。その反省を第40回展における「木のトレイづくり」³⁾で改善を行い、厳選した5名の学生デザインを取り入れた。しかし、木のトレイの単価コストが高く、木地を数多くつくることができなかった。そのため、2日間ある矯正展において1日で終了してしまう反省・課題となってしまった。

そこで、今回は木地となる材料コストの見直し、また学生からのデザインについての提案(どのような年齢の方々に、どのようなデザインが好まれるのか)等を考慮しながら、木地づくりを作業部門と相談の上、依頼・制作することとなった。

以上をふまえ、本稿では、第41回矯正展における実践について報告するとともに、実践後に学生たちから提出された報告書の記述について分析を行い、「矯正展」における木育教材を通して学生たちの学びの姿について検討すること

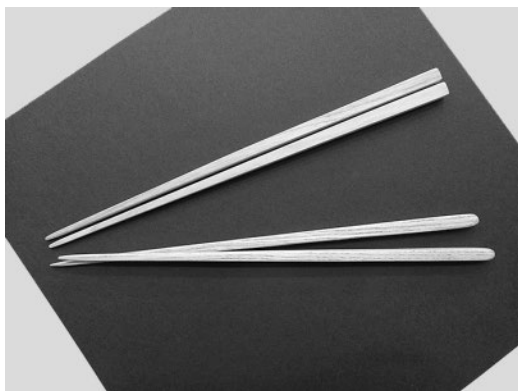


写真1 第39回展のお箸づくり作品



写真2 第40回展・木のトレイづくり木地

を目的とする。

2. 方法

上述の点を考慮しながら、第41回矯正展では樺材を利用した“状差し&ペン立て”を考案した。11名の学生(4回生)がデザインを行い、そのデザインをもとに刑務所作業部門(受刑者)に木地の制作を依頼した。木地の数も400人分の数を確保することができた。その木地を



写真3 学生デザインの“状差し&ペン立て”



写真4 鋸で切り込みを入れる

使用して木育による造形ワークショップを行い、地域住民に作品づくりを楽しんでもらうといった内容を検討し、実施した。

なお、本実践における倫理的配慮に関しては、調査協力者に対し、研究の目的及びプライバシーの保護等の倫理的配慮を伝え、データの使用等について協力者及び協力機関からの同意を得ている。

3. 実施内容

○開催場所：第41回京都矯正展（京都刑務所）

○日時：平成30年10月27・28日の2日間

27日（土）：10：00～16：00

28日（日）：10：00～15：00

○内容：学生のデザインによる「状差し&ペン立て」制作（先着400名）

○参加学生：造形ゼミ3・4回生と2回生。

21日18名，22日21名。

当日は天候にも恵まれ、地域住民の来場者が多いことが見込まれた。第40回展で木地となる材料不足となったように、“状差し&ペン立て”となる木地がどのくらいのペースでなくなるかということ算定し、200個ずつ2日間に分けて行うこととした。

〈実施1日目・27日〉

“状差し&ペン立て”の制作過程は、参加者が状差しとなる箇所を自由に決め、鋸を使って切り込みを入れる。そして、用意した鉋（かな）や木工やすりを使って角を丸め、最後に紙やすりを使って仕上げるといった過程である。

実施1日目、開始から4時間後には200個用



写真5 鉋で角を落とす



写真6 紙やすりで磨く

意した“状差し&ペン立て”の木地がなくなってしまったため、2日目の木地から40個ほど追加したが、それでも1時間ですべてなくなってしまった。無料ということも影響したためか、参加者が途切れることがなく、参加者の多くが楽しく制作に取り組んでいる様子を窺うことができた。参加した学生たちも、普段接する幼児だけでなく、小学生ともかかわる機会となった。また、大人との世代間コミュニケーションを楽

しんでいる様子が窺われた。

〈実施 2 日目・28日〉

1 日目に40個追加したため、開始から3時間後にすべての木地がなくなってしまう。制作過程での時間配分を再考する反省点が挙げられた。しかし、制作過程のなかで参加者が普段あまり手にすることのない鉋を使用したことは、参加者も楽しかった様子であり、盛況であったように思われる。



写真7 全体の様子



写真8 完成した子どもの作品

4. 結果

「矯正展」における木育教材を通した学生たちの学びの姿について検討するため、ワークショップ終了後に学生から提出された報告書を分析した。

ワークショップは「学生が状差し&ペン立てのデザインを考える」→「京都刑務所の木工作業所がそれを加工する」→「それを使って参加者（市民）が作品を完成する」という流れで実施されている。そこで、実践の目的に対応し、

記述の特徴を以下の視点でカテゴリー化し、さらにそれぞれに下位カテゴリーを生成した。

- (1) 矯正展（ワークショップ）における学び
- (2) 木育による作品制作（デザイン）
- (3) 刑務所や受刑者（ワークショップの背景）の印象や理解

さらに、矯正展の経験による差異を検討するため、矯正展を初めて経験した学生（造形ゼミ11期生，以下1年目）と、昨年に続き2回目の経験である学生（造形ゼミ10期生，以下2年目）との記述を比較することとした。

以下では、この分類に沿って学生の代表的な記述を示しながら考察を行う。

- (1) 矯正展（ワークショップ）における学び

矯正展における学びは、「参加者の理解」と「参加者への支援」「運営を通した学生同士の学び」に大別できた。

まず、「参加者の理解」について、参加者の道具の使用についての気づきが述べられている（a，b）。さらに、年齢層が広いこと（高齢者から幼児まで）や（c），別のイベントと比較により、対象や環境の違いにより対応を変える必要があることを実感していたことが窺われる（d）。

「参加者への支援」については、参加者とのかわりを通して制作における支援についての様々な気づきや学びが述べられている。1年目の学生の中には支援に難しさを感じている記述も見られる（e）。これに対して、2年目の学生においては、子どもの主体性を尊重することなど、より教育的な配慮への気づきが述べられている（f）。さらに、支援を通して参加者に矯正展の意義を伝えることの重要性を指摘する意見も見られた（g）。また、また支援を通して自分自身の成長を感じている記述も見られている（h）。

「運営を通した学生同士の学び」について、学生は企画を運営することを通して、先輩の姿をみたり（i），学生同士で連携したりすること（j）の重要性を学んでいることが窺われた。また、2年目の学生の中には、今回の学びを次に引き継ぎたいという記述も見られた（k）。

【学生からの報告書（抜粋）①】

（①：1年目，②：2年目の学生の記述，以下同じ）

○参加者の理解

- a. ①子どもも多く参加し，テレビで大工さんが使っているのを見たことがあるという子どもがいて，大工になったような気持ちで一生懸命に取り組む姿が見られた。普段めったに使えないような道具を体験できることが参加者の方に興味を持ってもらうことにつながると学んだ。ただし，カンナものこぎりも刃物なので，安易に使用してはいけないことをしっかり伝えることが大切だと思った。
- b. ①ノコギリで切ることやカンナで削ることよりも紙やすりをかけることに，皆，力を入れていて紙やすりの回転が遅いと感じた。
- c. ①子どもから大人まで幅広い年齢の方々が楽しめるブース作りの難しさがある。今回の矯正展では，ペン立て作りを行ったが，幼児から高齢の方までのたくさんの参加者がみられた。工程の中で，のこぎりを使うことがあったが，のこぎりを使うことをこわがる子がいたりして，幼児には少し難しいという印象を受けることがあった。
- d. ①やんちゃフェスタでも子ども広場でも反省にあがる内容だが，環境構成をよく考えることと現場での問題への臨機応変な対応の重要性を感じた。

○参加者への支援

- e. ①制作の際，子どもに対するノコギリの援助がうまく伝わらず戸惑ってしまった。子どもの身長だとノコギリの刃が真っ直ぐか上向きにあたりスムーズに切り進まない子が多かった。
- f. ②大人の参加者も子どもの参加者も私たちが作業や注意事項の説明をする際に淡々と説明をするよりも，なぜそうするのか，なぜしてはいけないのかをきちんと丁寧に説明したほうがより理解が深まり制作の意欲が高まっていたように感じた。また完成し

た見本を見せながら説明することでより作業のイメージがしてもらえやすいように感じた。

- g. ②参加者の方に楽しんで道具を使って木を扱って頂くこと，また，どのように京都刑務所と京都女子大学が連携しているかということをごちらもお伝えすることが出来て，初めてワークショップが成功したといえるのではないかと思う。
- h. ①4歳くらいからお年寄りまで幅広い年齢層のかたと関わられたことで，自身のコミュニケーションの幅が広がった。

○運営を通した学生同士の学び

- i. ①先輩の方々が，子どもたちにわかりやすく教え，援助している姿をみて，子どもたちにとって少し難しいと感じる内容であっても，私たち自身がこういった援助をすべきなのか，しっかりと考えて適切な援助をすることで，子どもができる幅が増えることを改めて感じ，単に見守るだけでなく，参加者が最大限に楽しめるよう，援助の仕方を工夫することも大切であると学んだ。
- j. ②学生間の連携の大切さである。（中略）案内する学生に手が空いた学生が，席が空いたことを知らせ，参加者を案内する学生が空いた席まで案内するということが行われた。このような体制を取ることでスムーズに運営ができた。
- k. ②どのようなデザインに需要があるのかを学べた分，来年度の矯正展で活用できるように後輩に申し送りしたいと思う。

(2) 木育による作品制作（デザイン）

作品制作に関する事柄については，「木育によるデザインについての学び」と「制作の充実感」に大別できた。

まず，「木育によるデザインについての学び」については，参加者の年齢層を踏まえることについての気づきが述べられている（a，b）。さらに，学生同士が協力することの必要性が挙げられている（c）。2年目の学生の記述において特徴的なこととして，昨年の反省を踏まえ，

デザインや工程を工夫し、より対象者に配慮していることが窺われた (d, e, f)。

「制作の充実感」については、自分自身のデザインが作品になること (g) や、自分のデザインが認められることにより、喜びや充実感を感じていることが窺われる (h, i)。

【学生からの報告書 (抜粋) ②】

○デザインについての学び

- a. ①年齢層を知ったうえで、デザインを検討していくことも大切であると学んだ。
- b. ①今回のデザインには、大人に好まれるようなデザインが多かったため、動物や乗り物など子どもを対象にしたデザインも多めに用意しておくべきだと学んだ。
- c. ①デザインを考える際に、学生同士のデザインの情報共有も必要になってくることも学んだ。
- d. ②ペン立て & 状差しのデザインを11種類に増やすことができ、参加者のデザインを選択する幅が増えた。それにより、参加者がデザインを楽しそうに選ぶ姿が昨年度よりも多く見られ、その中で学生と参加者との会話も弾んでいたように思う。
- e. ②昨年度は木のトレイの個数が少なかったことと、来客者の行う制作工程が少なかったことが反省に挙げられていたことから今年は数が量産出来るものを作りたいと考えた。そのため、何を作るかということとデザインを刑務所の方と何度も相談し、状差し & ペン立てに決定した。また、作業工程が少なかったという反省点から、鉋・鋸・やすりの3工程を取り入れた。
- f. ②複雑なデザインは参加者の方に分かりにくいという反省点を踏まえ、今回はシンプルで分かりやすいデザインを学生が心がけたことが良い点であったのではないかと感じた。

○制作の充実感

- g. ②自分がデザインしたものが作品になるという喜びがあった。
- h. ②目の前で自分のデザインしたものを選択

していただいたり、「素敵デザインだね」と言葉をかけていただいたりなど自分の自信に繋がる言葉をたくさんかけてもらった。

(3) 刑務所や受刑者 (ワークショップの背景) の印象や理解

刑務所や受刑者 (ワークショップの背景) の印象や理解については、学年による記述の差異が顕著であった。

まず、1年目の学生の記述から、そのほとんどが、実践以前は刑務所についてのネガティブなイメージが強かったことが窺われる (a)。しかしながら、矯正展への参加の中で刑務所や受刑者についての説明や施設見学を通して、新たな理解や発見をし、不安が解消され、ポジティブなイメージや身近な印象を抱いていることが窺われる (e, f, g)。

【学生からの報告書 (抜粋) ③】

(①1年目の学生)

○ネガティブなイメージ

- a. 矯正展に参加するまで、刑務所に対して受刑者が生活しているところで、一般人は関わることのない、厳しくこわい施設だという印象しかなかった。
- b. 刑務所が罪を犯した人が収容される施設ということであまり良い印象はなく、矯正展が誰を対象としてどのような目的をもった催し物であるのか想像もつかなかった。

○新たな理解や発見

- c. 食事に関しては、信仰している宗派によって食事のメニューを変えたり、身長などの体型に合わせて食事量を調節したりと細かな配慮がなされていることに驚いた。
- d. 私たちが使っている物の中にも刑務所で作られたものがあるかもしれず、私たちの身近な場所に刑務所に関わりのあるものがあるのだと感じた。

○イメージの変化 (ポジティブなイメージや身近な印象)

- e. 私の中での刑務所のイメージは閉ざされた空間の中にひっそりとある建物というもの

でしたが、実際に訪れて中も拝見させて頂いて印象が全く変わりました。運動場が設備されていたり、太陽の光もたくさん感じられてとても明るい空間で、学校のような場所だなと思いました。

- f. 刑務所での役務は誰にでもできるようなものだけが用意されているのかと思っていましたが、技術をもっている受刑者がそれを発揮出来る機材を用意しておくことでより高品質のものを作ることができ、そのために矯正展での販売や一般企業への材料・商品提供を通してしっかりと利益を得られるのだと分かりました。
- g. 刑務所は暗く冷たいイメージがあるが、矯正展で見学させていただくと収容者の健康を考え朝は運動を実施していたり、私たちが憧れるような機械を使っての家具作りや洋裁、昼食も自分たちで作っていたりと「生活」を感じることができた。

次に、2年目の学生の記述から、多くの学生がすでに昨年参加した時点で刑務所や受刑者についての不安は軽減されており、刑務所や受刑者と連携することがスムーズにできていることが窺われた (h, i)。その上で、自分自身が刑務所や受刑者について理解するだけでなく、刑務所と地域のつながりが重要であること (j, k) や、矯正展を通じて自らが参加者への理解を促すことの意義 (l, m) を感じていること、そのためには自分自身が刑務所との連携にネガティブな印象をもってはいけなとする意見も見られている (n)。このように、2年目の学生は、昨年の経験を踏まえながらより深くワークショップの意義を理解していると考えることができる。

ただし、不安が完全には払拭できていないことが窺われる記述も見られている (o, p)。

【学生からの報告書 (抜粋) ④】

(2) 2年目の学生)

h. 二年目で、京都刑務所がどのような場所なのか、中はどのようになっているのかを去

年学ばせていただいた分、怖い・不安といった感情はなかった。

- i. 刑務所の印象に関して、2回の経験を通し、間接的ではあるが、受刑者の方と連携することができた。今まで遠く感じた存在が急に身近に感じられ、刑務所に抱いていた暗いイメージも払拭された。
- j. 矯正展に参加をさせて頂いて、京都女子大学と京都刑務所の方々との連携だけでなく、京都にお住まいの地域の方々との関わりが、とても大切であると感じた。
- k. 子どもが刑務所のことを幼い頃から知っておくことで、大人になった時にも、一人の地域の関係者として、京都刑務所を支えていくことが出来るのではないかと思った。
- l. どのような経緯、意図でワークショップを行っているのかについて参加者の方に知ってもらえるようなものを設置することが重要で、それによって刑務所、受刑者に持つイメージが変わっていくのではないかと考えた。
- m. ワークショップ内での「刑務所」「地域」間の連携が薄いように感じた。学生のデザインを商品化することによる「刑務所」「学生」間、そして活動を通してコミュニケーションを図る「学生」「地域」間の連携は十分にあった。しかし参加者との会話の中で、「ペン立て& 状差しは学生がデザインしたものを刑務所で作られた」ことを口にしても、それに対して特に興味を持つ参加者はごくわずかであった。そのため、矯正展でワークショップを行っている理由や経緯等をより会話の中に盛り込んでいくと同時に、文章・図式化したものをブース内に設置して、矯正展における本活動の意図を知ってもらった上で作業ができるように工夫することもまた必要であると感じた。
- n. 今回のワークショップで受刑者へのイメージの改善につながったはずが、それを伝える立場の我々が偏見のようなものを持っていてはそれを妨げてしまう可能性がある。
- o. 実際受付をしているときにデザインの説明

をしていると「刑務所」という単語を無意識のうちに使わないようにしていた学生がいたということが分かった。

- p. 今年のニュースで愛媛県の刑務所から受刑者が脱走したというものもあるので、注意が必要な場所ではあると考える。

5. 木地制作における受刑者の声

継続して行われているこの活動において、受刑者がどのように感じているかということ、次の2点「学生がデザインする木地づくりに対して、どのような気持ちで作業しているか」「学生が提供したデザイン（動物カスタネット、ペン立て）を見てどう思ったか」について京都刑務所作業部門矯正処遇官の方に依頼したところ、以下のような聞き取り調査としての答えが返ってきた。

「学生がデザインする木地づくりに対して、どのような気持ちで作業しているか」という質問に対して、「それを使う人の気持ちになって制作でき、大人の考えではなく子ども心になりながら、デザイン等の作業を行うことができる」。

「刑務作業にわざわざいろんなデザインを提供して頂いていることに対し、信頼を失わないように、制作物の品質向上と作業の効率化に一層心がけることができます。期待に応えるように作業しています」といった返答があった。

また、「学生が提供したデザイン（動物カスタネット、ペン立て）を見てどう思ったか」という質問に対して、「最初は単品でみていると何か物足りなく感じる図案もありましたが、実際に材料に焼き付けてみると、イメージより数段よいものになりました」、「デザイン画も実物より拡大して描いてくれているので、細かい線も分かりやすくなり、満足のいく仕上がりになったと思います」、「京都女子大学からデザインを頂けたのはとてもありがたく思いました。自分たちの社会復帰を支援する輪をより身近に感じ、みんなの努力をととても感謝します」、「みんなの努力を裏切らないよう、一日一日、安全作業で早期の社会復帰を果たすように頑張りました

いと思いました」といった返答があった。

こうした「受刑者の声」から考えられることは、学生のデザインを通して、制作やイメージに広がりが見られていることや、デザインを通して学生や社会との繋がりを感じているようである。そして、学生との共同活動を通して、制作に対する充実感、ひいては更生への意識が高まっていることが窺われる。

現時点では、受刑者の声の聞き取り調査は少数であり、学生たちの実践活動への直接的な繋がりはないが、今後はこのような受刑者の声なども参考とした木育教材による造形ワークショップを展開していくことも重要であろう。

6. まとめ

このように、2回連続して参加した学生の記述の特徴や、初参加の学生のそれとの比較から、「矯正展」への継続的な参加による学生の成長について、以下のようなことが明らかとなった。

学生たちは、「矯正展」への継続的な参加により、刑務所や受刑者に対する理解の深まり、不安の軽減などを感じていることがわかった。そして、次第に造形ワークショップの活動への余裕が生まれ、参加者への制作支援や関わりの充実や刑務所や受刑者に対する啓蒙が生まれた。これらは次第に支援技術の向上や造形ワークショップの社会的な意義についての理解の深まりへと変化し、刑務所・受刑者、地域、大学の連携への理解の深まりへと繋がることとなった。

このように、大学での木育による造形教材に関する学びと京都刑務所の木工作業との連携を通じて、地域への貢献とともに、学生は「木育」による教材の作成や保育への応用、さらには幼稚園・保育園に加えて小学校での技術的な指導のあり方を考えること、そして様々なコミュニケーションなど多くのことを学び、自己の技能や意識を向上させる結果となった。

今後もこの連携を継続的な活動として、刑務所・地域への理解、連携を通じた学生の意識向上、そして木育教材の開発について検討していく必要がある。

引用文献

- 1) 朝日新聞2016年10月6日29面(京都市内版)
- 2) 矢野真(2017). 地域と学生を結ぶ木育をテーマとした造形プロジェクト, 日本世代間交流学会第8回全国大会要旨集, 22.
- 3) 矢野真(2017). 京都刑務所「矯正展」における造形ワークショップ“ワクワク工作キャラバン”, 京都市「学まち連携大学」促進事業活動報告書2017, 11-12.

付記

本研究は, 令和元年度科学研究費 基盤(C) 研究課題(課題番号:19K02821)「幼小連携のための保育・教育実践における木育教材の開発」(研究代表者:矢野真, 分担者:田爪宏二)の補助を受けて行われたものである。